

児童・生徒・教員の三者交流による「中1ギャップ問題」解消の実践

滝川市立明苑中学校 学級数 14 (校長 宮本 千裕)

I 実践テーマの趣旨

本校では、社会的スキルの定着が不十分等の個人的な要因あるいは、家庭的な要因などを抱えた生徒が、中学校へ進学した際に、学習環境や生活環境等の大きな変化に適応できないといった小・中学校間の接続の問題（いわゆる「中1ギャップ問題」）が課題となっていた。そのような中、昨年度から北海道教育委員会の「中1ギャップ問題未然防止事業」の指定を受け、校区内の小学校と連携を図りながら、課題の解決に向けて取り組んできた。

II 実践の概要

1 児童生徒同士の交流

児童と生徒の交流場面を設定することにより、児童と生徒の間で「縦のつながり」の意識が生まれ、児童生徒の所属意識の高まりが見られるようになった。

(1) 中学校「いじめ撲滅集会」への小学校第6学年の児童の参加

中学校の生徒会が主催した「いじめ撲滅集会」に、小学校第6学年の児童を招待し、いじめ撲滅スローガンの採択に参加したり、感想を発表したりするなど、中学校入学に向けていじめは許さない風土づくりを行った。



【中学校「いじめ撲滅集会」】

(2) 中学校の部活動体験

夏季休業中に、小学校第6学年の児童の希望者を招待し、中学校の部活動体験を実施した。中学生が小学生に対して指導する場面が見られ、児童生徒の交流の輪がさらに広がった。

2 児童と教員の交流



【小学校への乗り入れ授業】

昨年度から、中学校の教員が小学校へ出向き、高学年に乗り入れ授業を実施している。中学校入学後、教科担任制に変わり、環境の変化に戸惑う新入生がいることから、小学校の頃から中学校の教員と授業を通して交流を図り、中学校の教員による専門性を生かした授業を実施することにより、中学校入学へ向けて心の準備を行うことができた。小学校の教員にとっても、中学校の教員と授業をすることにより、学習の系統性等を意識するよい機会となった。

3 教員同士の交流

時間の制約等があり、小学校と中学校の教員の情報交換の場を設けることができなかったが、昨年度から定期的に協議する機会を設定し、情報交流に努めている。その中で、生徒指導に関する情報交流や児童生徒の交流行事の企画や運営方法等について話し合い、実践に努めている。

III 取組の成果と課題

- 小・中学校が連携を図りながら実践を積み重ねたことにより、今年度入学した第1学年の不登校の生徒数が大きく減少した。今後も、児童生徒の心に寄り添った交流を実施し、「中1ギャップ問題」の解決に臨んでいく。
- 「中1ギャップ問題」の解決には、小学校と中学校の教員が連携することが極めて重要であることから、協議の場の設定の仕方を工夫する必要がある。